

北部医療センターだより

Hiroshima City North Medical Center Asa Citizens Hospital 2026年夏号

地方独立行政法人広島市立病院機構 広島市立北部医療センター安佐市民病院
〒731-0293 広島市安佐北区亀山南1-2-1 Tel 082-815-5211 (代表) <https://www.asa-hosp.city.hiroshima.jp/>

ご自由に
お持ち帰り
ください

HPIはこちら



なが た しん じ
病院長 永田 信二

地域の皆さまとともに歩む

2025年4月に広島市立北部医療センター安佐市民病院の病院長に就任し、早いもので1年が経過いたしました。当院は1980年に可部南の地で開院してから46年、そして現在の亀山南への新築移転から5年目という大きな節目を迎えています。これまで長きにわたり当院を支えてくださった地域の皆さま、そして日頃より連携いただいている医療機関の皆さまに、心より深く感謝申し上げます。

当院は、がん診療、救急診療をはじめとする各診療科の専門分野において、高度かつ専門性の高い医療を提供する地域の中核病院です。

急な体調の変化や重い病気に対しても、24時間365日体制で迅速かつ適切に対応し、地域の皆さまの「いざという時の安心」を支えております。一方で、地域医療を将来にわたって守り続けていくためには、医療機関同士の役割分担と連携が欠かせません。当院では、高度な治療や専門的な医療を必要とする患者さまの診療に注力するとともに、状態が安定された患者さまについては地域の医療機関へ紹介し、引き続き診療をお願いしています。こうした取り組みにより、地域全体で患者さまを支える「地域完結型医療」の実現を進めています。

また、急速に進む高齢化や医療従事者の不足といった社会的課題に対応するため、当院では医療のデジタル化DX(デジタルトランスフォーメーション)を積極的に推進しています。特にパソコン業務を自動化するRPA(ロボティック・プロセス・オートメーション)の活用により、200を超える業務プロセスの自動化を実現し、職員の業務負担軽減と医療の質の向上の両立を図ってまいりました。これらの取り組みは全国的にも先進的な事例として高く評価されており、今後も生成AIなどの新しい技術も取り入れながら、職員がより患者さまと向き合う時間を確保し、安全で質の高い医療の提供に努めてまいります。

質の高い医療の源は、職員一人ひとりの成長と心身の健康にあります。

私は「病院は人で成り立つ」という考えのもと、医師、看護師、薬剤師、技師、事務職をはじめとするすべての職員が誇りとやりがいを持ち、安心して働き続けられる環境づくりに力を入れています。職員がいきいきと働くことが、患者さまに寄り添った温かい医療の提供につながるものと考えております。

これからも、「患者さまが必要な医療を、必要な時に、適切に受けられる体制」をさらに充実し、地域の皆さまにとって「安心して受診できる病院」、そして「いつでも頼れる病院」であり続けられるよう、職員一丸となって取り組んでまいります。

今後とも変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

～脳卒中は時間との勝負～

～つまった脳の血栓を取りのぞく

「血栓回収療法(けっせんかいしゅうりょうほう)」のお話～

日本内科学会認定医／日本神経学会 専門医・指導医／日本脳卒中学会 専門医・指導医／
日本脳神経血管内治療学会 専門医・指導医／日本頭痛学会専門医／
日本脳ドック認定医／米国心臓協会フェロー

脳神経内科 部長
内科総合診療科 部長
救急科 部長
よし もと たけ し
吉 本 武 史



ある日突然、顔がゆがむ・手が動かない・言葉が出にくい——。もしかすると、それは「脳卒中(脳の血管の病気)」のサインかもしれません。脳卒中は、できるだけ早く治療を始めることがとても大切です。広島市立北部医療センター安佐市民病院は、広島市内で8年連続(2016～2023年)「脳卒中の入院患者数 第1位」を続ける救急の病院として、24時間いつでも最新の治療をおこなっています。

■ 脳卒中ってどんな病気?

脳卒中とは、頭の中の血管が「つまる」「やぶれる」ことで、脳の働きが急に壊れてしまう病気の名です。主に3つの種類があります。①脳梗塞(血管がつまる)、②脳出血(血管がやぶれて出血する)、③くも膜下出血(脳の動脈瘤がやぶれる)です。日本では、寝たきりになる原因の上位に挙げられる病気のひとつです。

■ こんなサインが出たら、すぐに119番!

いちばん大切なのは「とにかく早く病院へ」。次の3つのうち、ひとつでも当てはまれば、ためらわずに救急車(119番)を呼んでください。①顔の片側がゆがむ(笑ったとき口の片方が下がる)、②片腕に力が入らない(前にあげるとストンと下がる)、③呂律が回らない・言葉が出てこない。たとえ症状が数分で消えても、油断はできません。本格的な脳梗塞の前ぶれ(一過性脳虚血発作)のことがあるからです。

脳卒中の前ぶれサイン「FAST」を覚えましょう

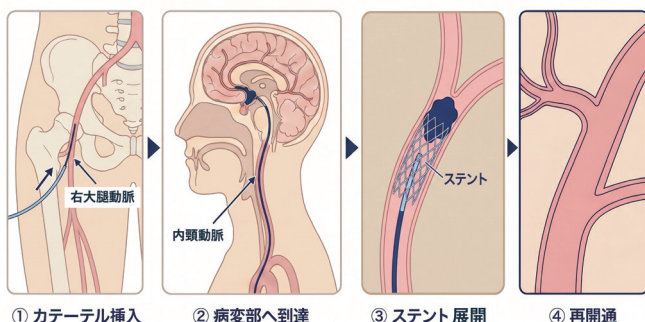


ひとつでも当てはまったら、迷わず救急車を呼びましょう

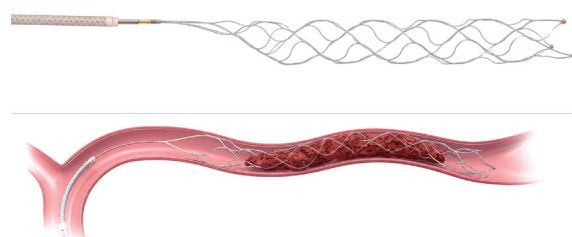
■ つまった血管を取り除く「血栓回収療法」

脳の太い血管が血の塊(血栓)でつまってしまうと、その先の脳は栄養と酸素がとどかず、数時間で壊れてしまいます。これまでは、点滴で血の塊を溶かす薬「t-PA(ティーピーエー:血栓溶解薬)」が中心でした。ただし、太い血管がつまっている場合は、薬だけでは十分に溶かせないことがあります。そこで近年、「t-PA」とともに一般的になっている治療が「血栓回収療法」です(図1)。足のつけ根の動脈から、細い管(カテーテル)を脳まで進めて、ステントリトリバー(網目状の血栓をからめ取る道具)(図2)や吸引カテーテル(血栓を吸い込む)で血栓をそのまま取り除く治療です。基本は発症から6時間以内ですが、CTやMRIなどの画像で「まだ救える脳が残っている」と確認できれば、最大24時間まで行う場合もあります。

◆ 図1 機械的血栓回収療法(ステントリトリバー)の手順



◆ 図2 血のかたまりをからめ取る「ステントリトリバー」



上:細い管の先から網目状の道具を広げます 下:血の塊をからめ取って体の外へ出します

■ 広島市で8年連続 第1位—安佐市民病院の取りくみ

当院は、広島県の北部をささえる「地域救命救急センター」です。脳神経内科・脳神経外科・脳血管内治療科・救急科の医師が、24時間チームを組んで脳卒中の患者さんを受け入れています。国(厚生労働省)のデータでは、脳卒中で入院する患者さんの数が広島市内で2016年から2023年まで8年連続で第1位。到着してすぐの検査(CT・MRI)から、お薬の点滴、血栓回収療法、リハビリ、そして自宅近くの病院への引きつぎまで、途切れなくサポートできる体制をととのえています。

■ いちばんの薬は「予防」です

脳卒中をふせぐためにいちばん大切なのは、ふだんの生活です。最大の原因は「高血圧」、ほかにも、心房細動(しんぼうさいどう:脈が乱れる不整脈の一種)、糖尿病、コレステロールの異常、たばこ、お酒の飲みすぎ、運動不足が危険を高めます。まずは、毎日の血圧測定・うす味の食事・禁煙・軽い運動・年に一度の健康診断から始めましょう。「いつもとちがうな」と感じたときは、どうぞ遠慮なく当院へご相談ください。



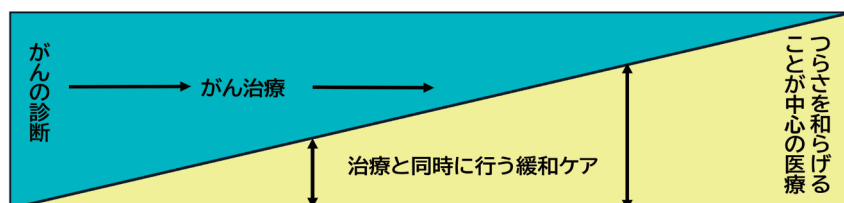
緩和ケア外来(サポートケア外来)のご案内

4月から当院の緩和ケア内科に着任いたしました関根龍一と申します。これまでは千葉県で約20年間、緩和ケア部門の責任者として診療に携わってまいりました。両親の住む広島への転居を機に、このたび当院で診療させていただくこととなりました。今後は当院における緩和ケアの普及と発展に努めてまいります。

皆さんは「緩和ケア」と聞いて、どのような印象をお持ちでしょうか。治療が難しくなった患者さんが、最期の時間を穏やかに過ごすための医療、というイメージをお持ちの方も多いかもしれません。このようなホスピスケアは現在でも大切な役割ですが、近年は緩和ケアの考え方が大きく広がっています。

一つ目は、がん治療の早い段階から緩和ケアが関わることの重要性です。抗がん剤治療中であっても、痛みや気持ちのつらさが強い場合には、緩和ケアの専門スタッフが主治医と連携して支援することが推奨されています(図1)。当院では外来診察前に症状や気持ちのつらさを数値でお伺いしており、必要に応じて緩和ケア外来(サポートケア外来)をご案内いたします。主治医の診察と同じ日に受診することも可能です。

がん治療と同時に行う緩和ケア(図1)



痛みや気持ちのつらさは経過の中で変化するため、その時々に必要なサポートを行います

二つ目は、緩和ケアの対象が「がん」に限られなくなっていることです。心不全、腎不全、進行した呼吸器疾患など、さまざまな重いご病気の方も対象となります。当院でも、病気の種類にかかわらず、痛みや息苦しさ、気持ちのつらさなどでお困りの方に対し、主治医と連携しながら入院・外来でサポートを行ってまいります。

ご自身やご家族が対象になるか迷われた際には、どうぞ遠慮なく主治医や看護師にご相談ください。皆さまが安心して治療や生活を続けられるようお手伝いできれば幸いです。



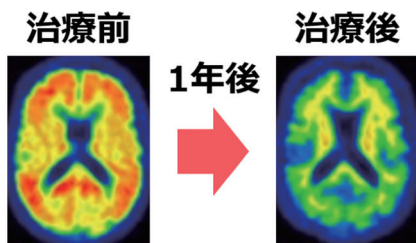
緩和ケア内科
部長 関根 龍一
せき ね りゅう いち

どうぞ遠慮なく
主治医や看護師に
ご相談ください。



北部認知症疾患医療センターだより Vol.4

アルツハイマー型認知症は最も多いタイプの認知症ですが、発症前や初期であれば進行を抑制する抗アミロイドβ抗体薬による治療を受けることができます。当院では現在までに100名以上がこの治療を受けています。アルツハイマー型認知症は脳にアミロイドβ蛋白が溜まる病気ですが、アミロイドPET検査をするとアミロイドβ蛋白が赤く染まります(図左:脳を水平に切った図です)。この患者さんは、抗アミロイドβ抗体薬の点滴を毎月1回続けたところ、たった1年でアミロイドβ蛋白は除去され、治療は完了しました(図右)。



全国では既に2万人以上がこの治療を受けておられ、認知症の進行を抑制することが期待されています。もっと詳しく聞いてみたい方は、広島市北部認知症疾患医療センターの専用電話にお問い合わせください。



脳神経内科 主任部長
広島市北部認知症疾患
医療センター
センター長 山下 拓史



専用電話 082-815-5299

相談日 月曜日～金曜日
(祝日・8月6日・年末年始を除く)

相談時間 午前9時～12時 午後1時～4時30分
(午後は面談のためお待たせすることがあります)

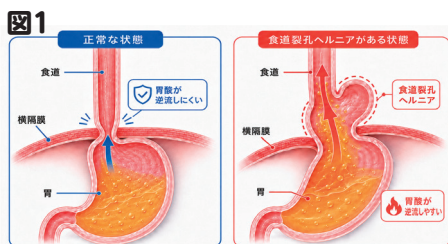
広島市北部認知症疾患
医療センター



胃薬で治らない胸やけに新しい内視鏡治療を ～内視鏡的逆流防止粘膜切除術のご紹介～

「胸やけが続く」「酸っぱいものがのどまで上がってくる」——こうした症状でお困りではありませんか。

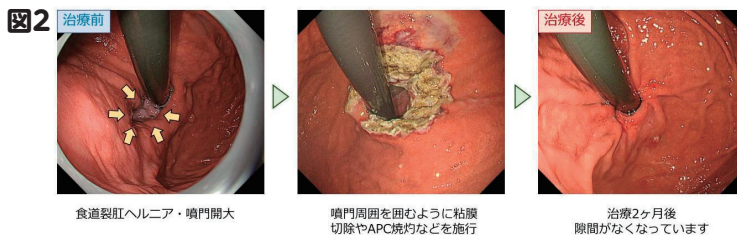
逆流性食道炎の治療は胃酸を抑えるお薬が基本ですが、なかには薬を飲んでも症状がよくなりません。



その大きな原因のひとつが食道裂孔ヘルニアで、胃の入り口が横隔膜の隙間からゆるんでしまい、胃酸が逆流しやすい構造になってしまいます。(図1)ヘルニアが大きい場合、薬だけでは逆流を抑えきれません。この状態を「難治性逆流性食道炎」と呼びます。

これまで根本的な治療は身体の負担が大きい外科手術しかなく、つらい症状を我慢している方も多くいました。しかし近年、保険適用となった新しい内視鏡治療が「内視鏡的逆流防止粘膜切除術」です。胃カメラで胃と食道のつなぎ目の粘膜を一部切除し、その傷が治る過程で粘膜が縮む力を利用して入り口を引き締め、逆流を起こりにくくします。お腹を切る必要はなく、入院も4～6日間と短期間で済みます。

「胃薬を飲んでも症状が続く」「ずっと胃薬を飲み続けることに不安がある」という方は、お気軽に当院消化器内科までご相談ください。近隣の先生方からのご紹介もお待ちしております。(図2)



食道裂孔ヘルニア・噴門開大

噴門周囲を囲むように粘膜切除やAPC焼灼などを施行

治療2ヶ月後
隙間がなくなっています

PICK UP!

公式YouTubeチャンネル

最新の技術紹介やWEB講演会などの医療従事者向けの動画だけでなく、施設紹介や検査の流れなど当院を受診される患者様や受診を検討されている患者さんの役に立つような動画を発信しています。



PICK UP!

公式Instagram

皆さまに親しまれる病院を目指し、院内や院内スタッフの活動、季節の風景、イベントの様子など、当院の特徴や魅力などを随時発信しています。あたたかい「フォロー」&「いいね」お待ちしております。

